

《特別寄稿》日本泌尿器科学会 100周年を迎えて

日本泌尿器科学会創設者 朝倉文三先生の 足跡と学生名簿の謎

保坂 義雄

医療法人一心会西大宮腎クリニック

始めに

平成24年は日本泌尿器科学会創立100周年に当たる。100年前の明治45年4月3日と4日に掛け東京帝国大学医科大学（現東京大学医学部医学科）東講堂において学界や政界等から多数の来賓者を迎え第1回日本泌尿器病学会総会が賑々しく開催された。初代の会長は在野の大家朝倉文三博士であった。当時48歳の朝倉は、帝国大学医科大学別課医学を卒業し、欧州に学び、そして皮膚科学に付随する地位にあった日本の泌尿器科学を独立した医学の分野として明確にすることに、特別な意義を強く感じていたものと思われる。本稿は、100年という記念すべき節目を迎えるに当たり、日本泌尿器科学会創設者朝倉文三の足跡を辿るとともに、調査の過程で遭遇した学生名簿の謎に就いても言及しておくこととする。なお、學や醫等の旧字体は一部引用箇所を除き学や医等の新字体に変換したことを付記する。

生い立ちと学生時代

朝倉文三が初代の教授を務めた東京慈恵会医科大学泌尿器科学教室のホームページ¹⁾に依れば、朝倉は群馬県小幡藩小参事朝倉良則の次男とされている。文久3年9月3日(1863年10月15日)生まれで生年から文三と名付けられたことが紹介されている(写真1)。このホームページの記述は東京慈恵会医科大学八十五年史²⁾の記述と重なる所が大きく、更には学会誌に掲載された逝去の際の追悼の辞にも述べられている³⁾。兄の名は鐘太郎で三男とする資料も見られる⁴⁾。また、朝倉の



写真1 朝倉文三先生(1863-1935)¹⁾と筆跡⁶⁾

子孫については東京慈恵会医科大学泌尿器科学教室で捜したが手掛かりは掴めなかったとのことである(颯川晋現教授談)。関東大震災の際に殆どの資料を消失したため同教室には関東大震災以前の資料らしい資料は残っておらず、逝去の際の大学としての追悼文の存在も確認されていないとのことであった(同教授談)。小幡藩には18世紀後半に活躍した真之真石川流三代目朝倉久馬(源恭良)という藩士がいたことが知られており朝倉氏が存在した事実は見られるが⁵⁾、朝倉久馬と朝倉文三との繋がりとは不明である。なお、出生地は上野国北甘楽郡小幡村^{3,4,6)}や群馬県富岡⁷⁾との記録が見られる。

昭和10年2月19日に慶応義塾大学医学部階段講堂で開かれた第42回日本泌尿器科学会集談会を追悼の場として廣川和一博士による追悼の辞の中で、朝倉先生は書を椿椿山に学び素真と号し、俳句や狂歌に堪能で、明治3年8歳で小幡上野小

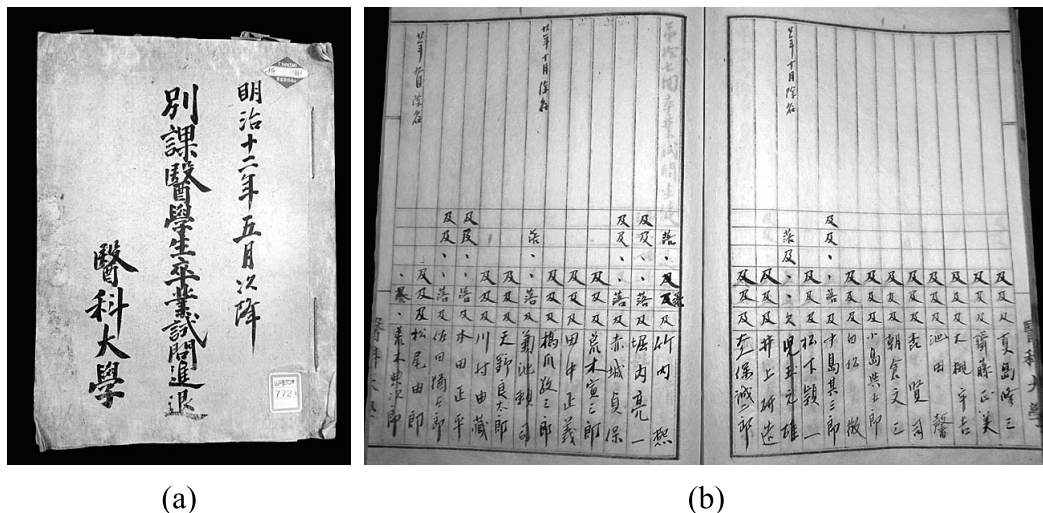


写真2 別課医学学生卒業試問進退
 (a) 表紙。(b) 右頁6人目に朝倉文三、左頁4人目に荒木寅三郎の名が見える

学校に入学、卒業後儒者菅沼正志の塾で漢学を修め後に前橋中学校に入学したが約2年後に廃校となり小学校の助教を勤め明治14頃上京、元富岡製糸場長岡本朝治氏に身を寄せ明治16年に東京大学医学部別課医学に入学したと述べられている³⁾。中学中退で大学に入ったように聞こえるが、同年3月23日没後50日祭での追悼会が学士会館で開かれた際の追懐談に岡山の同窓との記述が見られ⁸⁾、明治12年創立の岡山中学校に在籍していた可能性が示唆される。幼にして神童と呼ばれ長じて秀才群を抜いていたとの記述⁴⁾が見られることから幼少期から優秀であったことが偲ばれる。

次に足跡が辿れる記録は別課医学に関する史料である。東京大学医学部医学科の同窓会組織である鉄門倶楽部の会員氏名録2011年版には故島菌順雄東京大学名誉教授による別課の解説と卒業生全氏名が掲載されている⁹⁾。別課について概略すると、明治期前半の西洋医学修得者不足に可及的速やかに対応するため既に普通の学科を学び得た20歳以上の者を対象に外国語等一部の授業を割愛し日本人教官が国語で講義を行い最少年限で卒業できる制度として導入されたもので、当初は本科生が寄宿舍収容であったため対照的に医学通学生教場と称され、他に製薬学通学生教場もあっ

た。医学通学生教場は3年、次いで3年半の課程で明治12年3月から4年制となった。設置は明治8年5月で、明治12年5月に最初の卒業生31名を送り出しており、明治13年10月に別課医学に改称され入学年齢18歳以上とされた。明治18年4月には募集停止となり最後の第20回卒業生は明治22年6月卒業で累計1,111名が卒業した。別課の臨床教育は神田和泉町の第二医院で行われており、履修科目等の詳細は東京大学医学図書館デジタル史料室¹⁰⁾の中で公開されている東京大学医学部一覧で見ることができる。鉄門倶楽部会員氏名録では卒業年別の記載となっているが実際には入学と卒業が年2回あったため2回分を合わせた上で五十音順としており、各回毎の名簿は週刊の東京医事新誌や別課医学学生卒業試問進退(写真2)¹¹⁾で確認することができる。前者は出身県の記載があり後者は医科大学の公式文書のため卒業時の正しい氏名が記載されていることになる。この両資料^{11,12)}に依れば、朝倉は別課医学第16回卒業生として明治20年5月30日に卒業している。同期計53名の中には京都帝国大学総長や枢密顧問官を歴任した荒木寅三郎、東京慈恵会医科大学学長や国会議員として活躍した金杉英五郎がいる。

学生時代の暮らし振りについては、負けじ魂で

怯まず譲らず喧嘩も厭わぬ勇気があり独立心が強かったといったことが学士会館での追悼会の際に述べられている⁸⁾ことからある程度伺い知ることができる。ドイツから帰国時に日本倶楽部が知名人の婦朝歓迎会を行うが同じ会員の自分にはしないのは何故かと振じ込んだ逸話⁸⁾とも相通じる話である。負け戦も辞さぬ一方で、上位者に高飛車に出られると黙ってしまう側面もあったようである⁸⁾。竹を割ったような性格であり⁸⁾、また、認むべき嗜好は無いが球戯は好むといった所も見られた⁴⁾。当時の社会的背景として明治維新以降の富国強兵や殖産興業の推進が基調にあり、大学卒業と時期を同じくして明治20年5月21日に学位令が公布され、当時の「末は博士か大臣か」といった進取の気概が若い朝倉にも育っていったことは想像に難くない。

大学卒業後

大正11年発行の大日本博士録⁶⁾に依れば、明治21年(但し別課卒業を明治21年と誤記しているので同じ文脈のため実際は明治20年の可能性が高い)8月医術開業免許下附を受け同年末より同26年8月まで札幌病院医員、根室病院副長、岩内病院長として奉職、その間二年間岩内町に開業と記録されている。大正14年発行の博士人物医科篇¹³⁾では札幌病院医員、根室病院副院長と記載されている。

また、昭和51年3月25日発行の東大第一外科の歩み(第一集)¹⁴⁾には「別科が廃止されますと漸次大先生方は廃官となって辞められた。その際に残られた人は田口博士と宇野博士のお二人のみでありました。」との記載があり、田口和美博士は解剖学教授のため外科系臨床医学を志した別課卒業生は必然的に宇野朗博士の下に集まるようになったものと推察できる。宇野博士は明治9年の東京大学医学部医学科(当時は東京医学校)第1回卒業生で、スクリバ教授が東京大学(当時は帝国大学)を離れた後明治26年9月7日から明治30年4月21日まで第一外科学教室の初代教授となっている。この明治26年9月7日の直前に前述のように朝倉は北海道の職を辞しており、朝倉

も第一外科に属したものである。東京慈恵会医科大学の資料¹²⁾に大学卒業後外科学を専攻したとの記述が見られることから確かであると考えられる。宇野教授は皮膚病梅毒学講座も担当しており、朝倉が皮膚科も専門にしていたことは不思議ではない。皮膚病梅毒学は帝国大学医科大学を明治23年に卒業した土肥茂蔵が明治31年2月19日にその後を引継ぎ泌尿器科も担当したが、泌尿器科は助教授に分担させており皮膚科主体の体制であった。なお、泌尿器科という名称はこの時に初めて用いられたものである。

前述の大日本博士録⁶⁾に依れば、朝倉は明治28年11月に自費渡欧し、独逸(ドイツ)国バーデン王国フライブルグ大学に入り翌年6月ドクトル、メヂチーネ、ユニバーサルの学位を得て明治30年帰朝、朝倉病院を開業している。東京慈恵会医科大学の資料¹²⁾では明治29年に帰国の際我が国に初めて膀胱鏡をもたらし、明治31年に朝倉病院開院となっている。朝倉病院は日本で初めての泌尿器科専門病院であった^{2,7,15)}。時期的に、病院開設は明治30年の宇野教授の退官と連動した動きだった可能性が考えられる。ここで特筆すべきことは、フライブルグ大学の学位は眼科で得たもので在独中に泌尿器科に転向したことと、林擘から耳鼻科の金杉と胃腸科の長興を引き合いに泌尿器科専攻を勧められていたということである⁸⁾。なお、日本外科学会誌創刊は明治33年4月4日で、その中の第一回日本外科学会員名簿に朝倉の名前はない¹⁶⁾。一方、明治33年12月15日に皮膚病学会が設立され、発会式における評議員15名の中に朝倉文三の名が見られる¹⁷⁾。朝倉は、明治35年に再び渡欧し瑞西(スイス)国ベルン大学にて研究しており¹³⁾、別資料では明治35年1月から翌36年6月までドイツに私費留学したとされている⁷⁾。帰国後、ベルン大学での研究を基に³⁾明治36年8月14日に86人目の医学博士となり⁶⁾、同年11月7日亀島町偕楽園にて榊順次郎及び遠山椿吉と3名合同で医学博士の得学位祝賀会が開かれ90余名の出席があったと記されている¹⁸⁾。朝倉病院は始め日本橋区蛸殻町2丁目1番地、次いで明治31年10月神田区駿河台南甲賀町

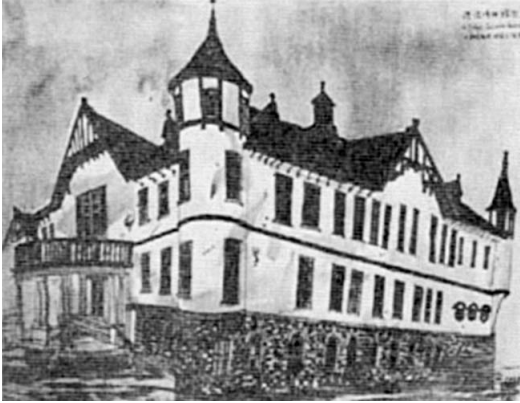


写真3 ルネッサンス式宏壮の一大病院⁴⁾と言い表された朝倉病院¹⁾

17番地、患者数が増え狭くなったため明治42年夏麴町5丁目27番地牛込見附内に700余坪の大病院を新築したとされている(写真3)³⁾。一方、婦朝後駿河台に病院開設し狭隘となり麴町区富士見町5ノ25に移転との記録もあり麴町の住所表示はこちらが正確である^{4,19)}。病院には、泌尿科、梅毒科、皮膚科、婦人科等があり⁶⁾、東洋のカスパールと称された³⁾朝倉は、「予は斯の治療機関の一小城に立籠りて、奮励努力、又他を顧みるの餘裕を有せず」と述べていたが⁴⁾、何時頃から一小城に籠っていたのではいけないと思うようになっていったのであろうか。文部大臣に泌尿器科独立講座新設の建白書を提出したとも紹介されている³⁾。明治40年に万国泌尿器病学会が設立され²⁰⁾、朝倉は明治44年7月10日より倫敦(ロンドン)で開催の第2回万国泌尿器病学会(AIU, 現在のSIU)及び9月24日より伯林(ベルリン)で開催の第3回独逸泌尿器学会に出席し17日に帰国と報じられ²¹⁾、別資料では、明治44年倫敦にて開催の国際泌尿器病学会総会、及び維也納(ウィーン)にて開催の独逸泌尿器病学会総会に出席し、途次欧州諸大学を歴訪したと記録されている¹³⁾。日本泌尿器病学会設立に先立ち日本人泌尿器科医として初めてAIUに参加²²⁾する等して日本泌尿器学会のために万丈の気を吐き⁴⁾当時最先端の欧州事情を視察してきたものと思われる。明治44年11月30日には亀島町偕楽園にて同志9人で学会設立に

向けた1回目の協議会を開いている²³⁾。

日本泌尿器病学会の設立とその後

日本泌尿器科学会ホームページの年譜に、明治45年1月17日の泌尿器病学会設立発起人会には座長の朝倉以下10名が集まり、専属事務所を麴町区富士見町朝倉病院内に置くことを定め準備委員5名を指名したと記載されている²⁴⁾。明治45年4月3日及び4日、東京帝国大学医科大学東講堂において長谷場純孝文部大臣や青山胤通東京帝国大学医科大学長を始め多数の来賓者を迎へ朝倉会長は第1回日本泌尿器病学会総会を成功裏に開催させた²⁵⁾。来賓者には荒木寅三郎京都帝国大学医科大学長や森林太郎(鷗外)の姿もあった。土肥慶蔵も学会設立を歓迎する祝辞を述べている。

土肥慶蔵の著作を集めた鶚軒先生遺稿^{26,27)}に、泌尿器科の当時の状況や歴史について述べている所があるが、記載があってもよい朝倉や日本泌尿器病学会には触れられていない。土肥は皮膚科と泌尿器科が共に主要な対象として性病を扱うという事情から日本では両科を産科と婦人科の様に一体化している実情があるが、「泌尿器科に至っては疾患の多くが梅毒科に密接の関係を有するに拘らず診断の方法及び治療の術式に於て皮膚病梅毒科とは大に趣を異にし殊に診断上特殊の技術と多くの時間を要する」²⁷⁾と述べ泌尿器科の独自性を早くから指摘していただけない、朝倉の泌尿器病学会設立は東京帝国大学を頭越しにした一足飛びの軽挙のように思われたのかも知れない。それを裏付けるような以下の記述が見られる。「日本泌尿器病学会 泌尿器病学を研究し其進歩普及を図らんとの主意を以て朝倉文三、阿久津三郎、林嘩、池田悦次郎、下平文柳諸氏を委員として起されたる日本泌尿器病学会は去月二十五日を以て之を発表せしが右は我日本皮膚科学会とは毫も関係なし」²⁸⁾

朝倉の立場からすれば、明治33年に皮膚病学会が設立され泌尿器科は皮膚科に付随しているような存在となっており、皮膚科と区別した泌尿器科専門の学会を作らなければ欧州先進諸国との差は一向に解消できないとの思いを強めていき、明

治36年に東京帝国大学から医学博士の称号を得た後、皮膚科主導の下にあった泌尿器科とは一線を画す準備を徐々に進め同志を増やしていったのではないと思われる。日本泌尿器病学会発足10日後の明治45年4月13日発行の医海時報には有楽座で4月4日に開かれた泌尿器病学会懇親会に関する記事で「内外科や耳鼻の向ふを張った朝倉博士の気心は買って挙げたい」との記述が見られ²⁹⁾、当時の受け止められ方が推察できる。特に金杉英五郎の設立した耳鼻科学会を取り上げていることは興味深い。朝倉は金杉より2年、土肥より3年生年が早く、当時の年齢感覚として学会設立を遅くはできないと考えていたのかも知れない。別課同級の金杉は明治26年2月19日に後に日本耳鼻咽喉科学会となる東京耳鼻咽喉科会を立ち上げ事務局を前年12月に自ら開業した東京耳鼻咽喉科医院に置き、同年10月28日東京麹町富士見軒で開催された第1回総会で会頭に就任している³⁰⁾。朝倉は同年夏まで北海道に在職していたが金杉の会頭就任時は間近なニュースだったと思われる。朝倉が学会を創立した金杉に触発されていたことは十分に考えられる。朝倉は日本泌尿器病学会を設立したばかりでなく、大正3年4月の第4回日本医学会に独立した分科として認めさせることにも意を尽くした³¹⁾。金杉は、大正8年4月の大学令施行により東京慈恵会医院医学専門学校が大正10年10月19日に東京慈恵会医科大学に昇格し初代学長に就任した後、大正11年2月に数えて60歳となった機会に朝倉病院を閉鎖した朝倉を同年4月³²⁾初代泌尿器科教授兼第2代皮膚科教授に迎えている。朝倉は既に年齢こそ高かったが金杉同様学会創立者であり、名医で業績も多く、大学同級で恐らく互いに気心が知れ信頼もでき、意中の人物ではなかったかと思われる。朝倉は大正10年3月10日に第1回尿科講習会を順天堂医院と朝倉病院共同で開催しているが、大正11年2月の朝倉病院閉鎖に際し学会事務所を朝倉病院から神田連雀町久阿津病院に移転している²⁴⁾。朝倉病院はその後通信博物館として使用された²⁾。神来的の妙技と謳われ、為人豪宕卓落、独逸の学芸研精と英国流紳士とを兼備する⁴⁾と紹介された朝

倉は、63歳になって篤学の名博士として其の名を擅にし遂に今日の位地と名声と財力とを贏ち得たが社交的襟懐を有せず多く世事を謝絶していた¹³⁾と評されている。第三者から見れば功成り名を遂げたとも言えるが、思い定めた道を情熱を以て揺るがずに歩んできた信念の人の姿が底に隠れ見えているように思われる。

因みに、鵜軒先生遺稿から関連する部分を抜粋して引用しておくこととする。我が皮膚科泌尿器科の史的回顧²⁶⁾の中で「教室を出て後更に修業を積んで優秀なる専門家となった阿久津博士は元來佐藤外科出身であるが、純粹の我教室出でも、坂口博士や佐谷博士の如きも少なくない。教授として新潟の高橋博士の如きは皮膚科と泌尿器科の両方面に於て、學術實地並行的に立派な功績を挙げて居る」と述べ、泌尿器科学の沿革²⁷⁾では「田中友治の助教授任命を得て同氏に泌尿器科方面を分擔せしめ同氏退官の後には中野助教授を後任とし先般同氏退官に付根岸助教授に分擔せしめて居る。(中略)而して九州帝國大學醫學部に於ては我東京帝國大學に先ち大正十三年七月七日官報を以て皮膚病黴毒學教室に皮膚病黴毒學(註：正しくは皮膚科學；官報第3562号，勅令第162号)と泌尿器科學の二講座を置くこととなり以て本問題の解決に先鞭を著けたのは誠に時勢に適合したる處置と謂はねばならぬ」と述べているが、日本泌尿器病学会を設立した朝倉や朝倉を日本最初の泌尿器科学の教授²⁾として迎えた東京慈恵会医科大学については記載が見られない。なお、中野等は退官前日の大正14年3月30日から翌31日まで教授となっている。土肥は大正15年6月28日還暦を機に退官している。朝倉は、その後昭和4年まで教授を務め、昭和5年土肥と共に日本泌尿器科学会名誉会長に推薦され³¹⁾、昭和10年2月2日に狭心症悪化のため満71歳で亡くなっている¹⁻³⁾。

ここで、土肥退官後の昭和3年4月3日に日本泌尿器病学会が日本泌尿器科学会と改称され、当時会長の北川正惇慶応義塾大学教授の尽力で土肥を中心とした日本皮膚科学会の泌尿器科部門と朝倉が中心となった日本泌尿器科学会が泌尿器科学会寄りに統合される緒口が生まれ実現するまで両

者の並立状態が続いていた³²⁾ことを指摘しておかなければならない。学会誌も皮膚科及泌尿器科雑誌と日本泌尿器病学会雑誌(昭和3年に日本泌尿器科学会雑誌と改称)の並存が続いた。その後、昭和15年1月24日に皮膚科学会東京地方会の泌尿器科部と泌尿器科集談会が統合され日本泌尿器科学会東京地方会として発足²⁴⁾する等の曲折を経て名実共に一体化していくまで更に年月を要している。泌尿器科集談会は大正9年6月5日に日本泌尿器病学会集談会として発足し大正10年9月以降前述の北川が中心となって開催してきたもので、北川は大正15年1月に東京帝国大学より半年早く独立した講座となった慶応義塾大学泌尿器科学の初代教授に就任している。統合された東京地方会は、皮膚科学会東京地方会より歴史の浅い集談会の回数を踏襲し第79回としている²⁴⁾ことから朝倉の流れが主流となったことが改めて示されている。

学生名簿の謎と夫人の記録と宗教

東京大学医学図書館デジタル史料室¹⁰⁾には明治16年版以前の一部の東京大学医学部一覧が閲覧可能であり別課学生名簿も掲載されている。しかし、明治15年版の別課最下級生に金杉英五郎や荒木寅三郎の名前はあるが朝倉文三の名前はない。学年が上がった明治16年版も同様である。朝倉、金杉、荒木が卒業した明治20年の卒業生名簿¹⁰⁻¹²⁾にない名前で明治15年と明治16年の同級生にはある名前に「大塚文造」という名前がある。朝倉と同じ群馬県出身で「文三」と「文造」は同音であり、もしかしたら大塚文造から朝倉文三に改名されたか一時大塚文造を名乗っていた可能性もあるのではないかと推察される。小幡藩のあった甘楽町教育課文化財保護係に問い合わせたが朝倉文三、朝倉良則、大塚文造という名前の記録は見当たらず、住民課住民係は第三者に戸籍情報は開示できないとのことであった。

夫人についての記録は、明治人名辞典¹⁹⁾に依れば幸子、大日本博士録⁶⁾では伯爵柳澤保恵妹で明治20年9月生の悦子で子女なしと記載されている。悦子は大和郡山藩主柳澤保申の娘で正しくは

柳澤保恵の義妹であった。悦子との年齢差が24歳近くであったことを考えると悦子は後妻だった可能性が考えられる。

宗教は病気になってからキリスト教に入信し⁸⁾葬儀も麻布霞町天主公会で行われている^{3,15)}。

終わりに

朝倉の先見の明を讃え日本泌尿器科学会設立の功績を高く評価することは100周年が最もよい機会であると考え、第100回日本泌尿器科学会総会に間に合うよう調査を進めたが、朝倉自身が自らを語る資料は僅かしか現存していないため本稿では憶測を述べ真偽は不明とせざるを得ないことが多かった。資料間の記述の不一致も少なからず見られ、極力原資料を調査するように努めた。大学、学会、雑誌の名称変更も分かりにくさの一因である。なお、100周年が101回でない理由は戦時下の昭和20年に総会が開催されなかったためである。

因みに、今回の調査に至った背景として、保坂が平成23年度鉄門倶楽部理事(編集担当)となり河邊香月元日本泌尿器科学会理事長から別課の実像を知る資料について問い合わせを戴いたことがあった。保坂は河邊理事長の下で日本泌尿器科学会幹事として学会ホームページ作成に関わり平成13年2月5日に一応の完成を見た。次いで3月15日には保坂が担当した年譜が追加されたが、年譜作成の際の経験が今回の調査の下地になったと言える。

最後に、朝倉の常に前向きな姿勢を示す一例として、当時既に実施していた手術用膀胱鏡、写真用膀胱鏡、尿管カテーテル法等を世に広めようと大正3年7月15日に著した学術書に残された言葉で締めくくるとして、『今茲拙著「膀胱鏡検査法」成ル、敢テ自ラ揣ラズ之ヲ世ニ公ニセントス、是レ本邦臨牀醫學界ニ於テ此法未ダ廣ク行ハレザルヲ以テコノ小篇ヲ楷梯トシソノ缺陷ヲ補ハントスルニ外ナラズ』³³⁾。

謝辞

本稿は、河邊香月東京通信病院名誉院長が、日本泌尿器科学会創立100周年を迎えるに当たり創

立に至る背景について調べてみるようお尋ねになったことが発端となったものであり、これまで知られている以上の見解が述べられたと思われることは河邊先生の明察及び助言に負う所大であり深甚の感謝を申し上げる。また、東京慈恵会医科大学医学部医学科泌尿器科学講座額川晋教授には教室内資料検索による協力と有益な助言による支援を戴いており篤く御礼申し上げます。

文献

- 1) 東京慈恵会医科大学泌尿器科学教室ホームページ <http://jikei-ur.umin.jp/history00.html>
- 2) 東京慈恵会医科大学八十五年史，東京：東京慈恵会医科大学；1965. p. 598-601
- 3) 名誉会長朝倉文三博士の御逝去，日本泌尿器科学会雑誌 1935；24(2)：144-6
- 4) 大正人名辞典，上巻，東京：(株)日本図書センター；1987. 底本：大正人名辞典，第四版，五十嵐栄吉編，東洋新報社，1918. p. 439
- 5) 上里町ホームページ <http://www.town.kamisato.saitama.jp/rekisi/rekisi04.htm>
- 6) 井關九郎，大日本博士録，第二巻，医学博士之部（其之壹），東京：発展社；1922. p. 醫博 57
- 7) 幕末明治期海外渡航者人物情報事典，手塚晃，石島利男編，金沢工業大学：雄松堂書店；2003. ID#104
- 8) 故朝倉文三博士追悼会，日本泌尿器科学会雑誌 1935；24(3)：228-30
- 9) 島蘭順雄，医学別課について，鉄門倶楽部編，会員氏名録 2011，東京：東京大学医学部鉄門倶楽部；2011. p. 巻頭 94-102
- 10) 医学図書館デジタル史料室 <http://www.lib.m.u-tokyo.ac.jp/digital/list.html>
- 11) 別課医学生卒業試問進退，医科大学編，順天堂大学医学部医史学研究室所蔵（山崎文庫 7721）
- 12) 東京医事新誌 1887；480: 859
- 13) 井關九郎，批判研究博士人物医科篇，東京：発展社出版部；1925. p. 547-8
- 14) 小金井良精，宇野朗追悼録抄録，東大第一外科の歩み（第一集），東大第一外科同窓会編，1976. p. 32
- 15) 皮膚科泌尿器科雑誌 1935；37(1)：138
- 16) 第一回日本外科学会員名簿，第一回日本外科学会誌，東京：南江堂；1900
- 17) 皮膚科及泌尿器科雑誌 1901；1(1及2)：88
- 18) 皮膚科及泌尿器科雑誌 1904；4(1)：102
- 19) 明治人名辞典，下巻，東京：(株)日本図書センター，1987. 底本：現代人名辞典，第二版，古林亀治郎編，中央通信社，1912. p. 719
- 20) SIU ホームページ <http://www.siu-urology.org/history.aspx>
- 21) 皮膚科及泌尿器科雑誌 1911；11(10)：1151
- 22) 日本泌尿器科学会ホームページ <http://www.urol.or.jp/iryo/meeting/siu-japan-history.html>
- 23) 日本泌尿器病学会創立記事，日本泌尿器病学会雑誌 1912；1(1)：131
- 24) 日本泌尿器科学会年譜 <http://www.urol.or.jp/shimin/history-annals.html>
- 25) 第一回日本泌尿器病学会概況，日本泌尿器病学会雑誌 1912；1(1)：136-45
- 26) 土肥慶蔵，我が皮膚科泌尿器科の史的回顧（日本之医界，大正 11 年 1 月 6 日），遠山郁三，高橋明編，鶚軒先生遺稿，上巻，東京：戊戌會；1932. p. 732
- 27) 土肥慶蔵，泌尿器科学の沿革（艸稿？）（大正 14 年），遠山郁三，高橋明編，鶚軒先生遺稿，上巻，東京：戊戌會；1932. p. 784-5
- 28) 皮膚科及泌尿器科雑誌 1912；12(2)：166
- 29) 医海時報 1912；930: 611
- 30) 日本耳鼻咽喉科学会沿革 http://www.jibika.or.jp/about/enkaku/enkaku_01.html
- 31) 日本泌尿器科学会雑誌 1930；19(4)：236
- 32) 川村猛，我が国における泌尿器科学の体系化，慶應義塾大学医学部泌尿器科学教室八十年記念誌，東京：慶應義塾大学医学部泌尿器科学教室同窓会；2006. p. 81-6
- 33) 朝倉文三，膀胱鏡検査法，東京：吐鳳堂書店；1914. p. 1